



校長室だより 29号

中島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
目指せ 三種目 日本一 !

【来週の行事】 11月8～12日 全商珠算・電卓課外
8日(月)～ 第4回教育相談週間

- 1 「振徳今昔」 旧職員 鶴ヶ野勉 10周年記念誌より抜粋
2 出逢ったいい話 『医療者の使命』 『致知』2010年3月号より抜粋

「学校づくりの思い出」(原文) 旧職員 鶴ヶ野 勉

私が本校に在職したのは開校からの4年間である。

一口に言って実に楽しかった。そしてたぶん、今までの20年近い私の教員生活の中でもっとも充実した輝やかな年月であったことにまちがいない。少々誇張に過ぎるかもしれないがあの4年間には教育があったように思える。学校が開校特有の初々しい弾んだ気分に入れ、生徒と職員が文字通り一つになって何かをやろうと思っていただけであろう。職員と生徒が一つになって事に当たる～これは昨今忘れられがちではあるが正に重要な教育のあるべき姿であると思う。

自分が今考えていること、行おうとしていることそのことが即、本校に何らかの形で投影されるのである。だからみんな弾んだ気分にならざるを得なかったのだろう。長嶺先生を中心にして排水の悪い運動場に泥まみれになって芝を植えたのもその一つであり、松浦、西園両先生らと相談しながら図書館の設計に没頭したのもその一つである。生徒会を設立し、生徒諸君らと一ヶ月もかかって生徒会規約を作ったのも、音楽室での第1回目の一年生だけの文化祭をやったのも、部活(卓球)に日曜、祭日を返上して練習したのも生徒と一体になって味ったあの弾んだ気分のせいだと思う。

今、本校が創立10周年を迎えたことを知って感慨無量である。人の心は移ろいやすいもので当時の情熱は薄らいでいるかもしれない。しかし、そうであればあるほど私は本校ですごした4年間を忘れることが出来ないのである。そして互いに共有したあの熱い思いや日々が今も本校にかかわった全ての人の心に息づいていることを確信するものです。

最後に、本校が10年を一つの区切りにして今後一段の輝きをましながら発展することをお祈り致します。

出逢ったいい話 『医療者の使命』

澤 村 豊 (さわむら・ゆたか=北海道大学病院脳神経外科医)

午前6時――。

まだ薄暗い北大病院の研究室でパソコンを立ち上げると、何十通という私宛てのメールが届いている。相談者の多くは、脳腫瘍を抱えた患者さんとそのご家族ら。

「この子を助ける手立てはないもののでしょうか?」「どうかよい知恵をお貸してください……」切迫感に満ちた長文のメールに、様々な配慮を巡らせた上で返事を出すと、続けざまに、2度、3度とメールがくることがある。時にはチャットのような状態となり、私がパソコンの前にいる限り、何度もやりとりが交わされる。

送り主は患者さんだけではない。全国にある脳外科や小児科の先生方からも、見てほしいとの依頼があり、メールに患者さんのMRI画像が添付されてくことも珍しくない。

私はそれらのメールに対して、必ず返事を出す。報酬は一切受け取らない。土曜、日曜も1日の休みもなく、朝も昼も夜も、時間の許す限り、キーボードを叩いてい

る。

小児がんの中でも、特に難しいとされる小児脳腫瘍の手術は、うまくいかなかった場合、命を落としたり、後遺症をつくってしまうことが多分にある。家族にとっても精神的負担の大きい手術を受ける前に、できれば他の医者意見も聞いてみたいと思うのが自然な感情だろう。しかしどこに聞いてよいのやら分からない。

私が行っているのは、そうして困っている患者さんたちのセカンドオピニオンで、相談内容に応じて、地元の信頼できる病院を紹介したり、知り合いの医師に対して紹介状を書く。患者さんが負担する交通費や術後のケアのことなども考えて、私自身はめったなことでは手術を引き受けない。受けるのは、どこの病院へ行っても手の施しようがない、というケースに限ってである。

私がそうした医療者としてのあり方を教わったのは、スイス人医師のニコラ・ド・トリボレー先生である。30代の頃、留学先で2年間の薫陶を受けた。先生は非常に有能な脳外科医であると同時に、患者さんに対しても大変優しく、学者としても研究熱心で、医者鑑のような方だった。そして私たちにいつも、「手術を行う前に、本当にその手術が必要かどうか、本当に患者さんの体を切らなければならないかをまずよく考えなさい」とおっしゃっていた。

その判断と見極めをするためには、専門分野以外にも膨大な知識の蓄積が必要だし、外科手術を学ぶことよりも、はるかに長い時間の勉強量が求められる。単に手術の仕方を覚えただけでは、本物の脳外科医とは呼べない。そのことを先生は、ご自身の身をもって示してくださっていた。

その後、脳外科医の福島孝徳先生にもアメリカでお世話になり、献体を使う臨床解剖の場を提供いただけたことで、難しい手術にも取り組めるようになった。そうやってこれまで様々な手術をこなしてきたが、患者さんのことで覚えているのは、自分の力及ばず助けられなかった方や、辛い思いをさせたそのご家族のことばかりで、凄惨な記憶以外には何もない。

患者さんやご家族は、ここに来れば助かると信じて、遠方から私を頼ってこられる。しかし必ずしもよい結果を残せるとは限らない。思いもせぬ事態に遭遇することもある。そんな時、ご家族の姿を私は黙って見ることになる。難しい手術だったのだから仕方がない、と、なんとか自分を納得させることはできない。

しかし脳外科医は、その痛烈な経験を積み重ねながら、60歳を過ぎて引退する日まで、限りなく進歩を続けていく。すると、数年前の手術を振り返ってみて、あの時そうせず、こうやっていれば助けられていたのに、という悔恨の念がいつまで経っても胸中を去らない。もうこれ以上、悲惨な思いはしたくない。誰かが他にやってくれればいい、と思うこともある。しかし様々な経験を長く積み重ねれば、その技術は誰でも非常に高いレベルにまで達してくる。

私がいま、難しい手術の依頼を引き受けるのは、国がお金をかけ、患者さんが自分の体を張って育ててくださった技術や経験を、世の中に少しでも返していかなければならないという気持ちがあるからだと思う。

だから、毎日寄せられる膨大な数のメールに、私は自分の得た知識と経験を注ぎ込んで、伝えるべき言葉を紡ぎ出している。しかしながら、我々脳外科医の生命は非常に短い。50歳近くになって、ようやく手術の何たるかが分かるようになってから引退まで、わずか10年余りの月日しかない。

私の外科医生命もあと数年だが、自分の周りには特に重症の患者さんたちが集まってくるため、人の命の火が消えていくのをいつものように見たり、聞いたりする。そして、どんな人の人生も有限で、残されている時間が非常に少ないことを痛感する。だからこそ、自分にいまできることを精いっぱい、淡々と行っていくしかない。医師の積み上げられた経験と技術は自分一人だけのものではなく、国民にとっての大切な財産であるともいえる。そのことを医療者はよく自覚し、さらなる研鑽を積み重ねなければならない。